

## 注意事項

当社は、2015年9月、2008年度から2014年度第3四半期までの決算について、過去に公表したもののから内容を修正し、関東財務局に訂正報告書を提出いたしました。

本冊子は訂正前の報告書であり、当該修正内容が反映されておられません。その結果、本冊子には、投資判断に利用するには不適切な情報が含まれていますので、それに依拠して投資判断を下すことはお控えください。当社は、本冊子の情報を使用されたことにより生じるいかなる事項についても、理由の如何を問わず一切責任を負うものではないことをあらかじめご了承ください。

また、この注意事項は、投資勧誘またはそれに類する行為を目的としたものではありません。投資に関するご決定は皆様自身のご判断で行っていただきますようお願いいたします。

なお、修正後の決算情報につきましては、訂正報告書をご参照ください。

以 上

# 四 半 期 報 告 書

(第174期第1四半期)

自 2012年4月1日 至 2012年6月30日

株式会社 **東芝**

# 目 次

	頁
表 紙 .....	1
第一部 企業情報 .....	2
第1 企業の概況 .....	2
1 主要な経営指標等の推移 .....	2
2 事業の内容 .....	3
第2 事業の状況 .....	4
1 事業等のリスク .....	4
2 経営上の重要な契約等 .....	6
3 財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 .....	7
第3 提出会社の状況 .....	13
1 株式等の状況 .....	13
(1) 株式の総数等 .....	13
(2) 新株予約権等の状況 .....	13
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等 .....	13
(4) ライツプランの内容 .....	13
(5) 発行済株式総数、資本金等の推移 .....	13
(6) 大株主の状況 .....	13
(7) 議決権の状況 .....	14
2 役員の状況 .....	15
第4 経理の状況 .....	16
1 四半期連結財務諸表 .....	
(1) 四半期連結貸借対照表 .....	17
(2) 四半期連結損益計算書 .....	19
(3) 四半期連結包括損益計算書 .....	20
(4) 四半期連結キャッシュ・フロー計算書 .....	21
2 その他 .....	45
第二部 提出会社の保証会社等の情報 .....	46
四半期レビュー報告書	
2012年度第1 四半期連結会計期間及び2012年度第1 四半期連結累計期間 .....	47

## 【表紙】

【提出書類】 四半期報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の7第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成24年8月10日

【四半期会計期間】 第174期第1四半期(自 平成24年4月1日 至 平成24年6月30日)

【会社名】 株式会社 東芝

【英訳名】 TOSHIBA CORPORATION

【代表者の役職氏名】 代表執行役社長 佐々木 則夫

【本店の所在の場所】 東京都港区芝浦一丁目1番1号

【電話番号】 03-3457-4511

【事務連絡者氏名】 法務部法務第一担当グループ長 篠崎 俊司

【最寄りの連絡場所】 東京都港区芝浦一丁目1番1号

【電話番号】 03-3457-2148

【事務連絡者氏名】 法務部法務第一担当グループ長 篠崎 俊司

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所  
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)  
株式会社大阪証券取引所  
(大阪市中央区北浜一丁目8番16号)  
株式会社名古屋証券取引所  
(名古屋市中区栄三丁目8番20号)

# 第一部【企業情報】

## 第1【企業の概況】

### 1【主要な経営指標等の推移】

回次		第173期 第1四半期 連結累計(会計)期間	第174期 第1四半期 連結累計(会計)期間	第173期
会計期間		自 2011年4月1日 至 2011年6月30日	自 2012年4月1日 至 2012年6月30日	自 2011年4月1日 至 2012年3月31日
売上高	(百万円)	1,326,105	1,268,863	6,100,262
営業利益	(百万円)	4,121	11,471	202,663
継続事業からの税金等調整前 四半期(当期)純利益(△損失)	(百万円)	3,146	△14,659	145,579
当社株主に帰属する 四半期(当期)純利益(△損失)	(百万円)	470	△12,105	70,054
当社株主に帰属する 四半期(当期)包括利益(△損失)	(百万円)	△8,563	△55,089	23,471
株主資本	(百万円)	846,835	791,305	863,481
純資産額	(百万円)	1,153,189	1,150,783	1,230,211
総資産額	(百万円)	5,404,471	5,569,578	5,752,737
基本的1株当たり当社株主に帰属する 四半期(当期)純利益(△損失)	(円)	0.11	△2.86	16.54
希薄化後1株当たり当社株主に帰属する 四半期(当期)純利益(△損失)	(円)	0.11	△2.86	16.32
株主資本比率	(%)	15.7	14.2	15.0
営業活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	△11,817	△8,949	334,997
投資活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	△81,326	△83,727	△377,227
財務活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	62,115	95,080	△240
現金及び現金同等物の 四半期末(期末)残高	(百万円)	224,238	208,320	214,305

(注) 1. 当社の連結財務諸表は、米国において一般に公正妥当と認められた企業会計の基準に基づいて作成されています。

2. 当社は、2011年7月に行ったランディス・ギア社の買収について、Accounting Standards Codification 805「企業結合」に基づき、取得金額の資産及び負債への配分を完了しました。これに伴い、第173期の数値を一部遡及的に組み替えて表示しています。
3. 売上高には、消費税等は含まれていません。
4. 営業利益は、売上高から売上原価並びに販売費及び一般管理費を控除して算出したものであり、経営資源の配分の決定及び業績の検討のため、定期的に評価を行う対象となる損益を示しています。事業構造改善費用及び固定資産売却損益等は、当社グループの営業利益には含まれていません。
5. 純資産額は、連結貸借対照表の資本合計(株主資本及び非支配持分の合計)を表示しています。
6. 株主資本比率の計算にあたっては、連結貸借対照表の株主資本を使用しています。
7. 基本的1株当たり当社株主に帰属する四半期(当期)純利益(△損失)は、期中の加重平均発行済普通株式数に基づいて計算されています。希薄化後1株当たり当社株主に帰属する四半期(当期)純利益(△損失)は、逆希薄化効果のある場合を除き、転換社債型新株予約権付社債の普通株式への転換又は新株予約権の行使により普通株式が発行されることになった場合に生じる希薄化効果を前提として計算されています。
8. 当社は四半期連結財務諸表を作成しているため、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載していません。

## 2【事業の内容】

当社は米国会計基準によって四半期連結財務諸表を作成しており、当該四半期連結財務諸表をもとに、関係会社については米国会計基準の定義に基づいて開示しています。これについては、「第1 企業の概況」及び「第2 事業の状況」において同様です。

当社グループは、当社及び連結子会社549社(2012年6月30日現在)により構成され、「デジタルプロダクツ」、「電子デバイス」、「社会インフラ」、「家庭電器」及び「その他」の5部門に関する事業を行っています。

また、持分法適用会社は200社(2012年6月30日現在)です。

当第1四半期連結累計期間(以下「当期」という。)において、当社グループが営む事業内容について、重要な変更はありません。

当期において、各事業に係る主要な関係会社の異動は概ね以下のとおりです。

(デジタルプロダクツ)

主要な異動はありません。

(電子デバイス)

主要な異動はありません。

(社会インフラ)

当社の連結子会社であったランディス・ギア社は、ランディス・ギアグループ内の再編に伴い、Landis+Gyr(Europe)AG(現 Landis+Gyr A.G.)を存続会社とする吸収合併により、解散しました。

なお、ランディス・ギア社の持株会社であるレッドアンドブルーホールディング社は、上記の再編に伴い、ランディス・ギアホールディング社(Landis+Gyr Holding A.G.)に名称変更しました。

(家庭電器)

主要な異動はありません。

(その他)

主要な異動はありません。

なお、2012年4月、当社の連結子会社である東芝テック(株)(以下「テック」という。)は、米国法人IBM社(International Business Machines Corporation、以下「IBM社」という。)のリテール・ストア・ソリューション事業を譲り受ける契約を締結しました。この契約に基づき、2012年8月、テックとIBM社は米国、カナダ、メキシコ及びオーストラリアの4か国に事業法人を設立し事業を開始しました。今後、他の国・地域においても、新会社を順次設立する予定です。また、日本には持株会社である東芝グローバルコマースソリューション・ホールディングス(株)を設立し事業を開始しました。当該持株会社は、現在その株式の80.1%をテックが、19.9%をIBM社が保有していますが、3年後にテックが100%子会社にする予定です。これらの事業法人及び持株会社は、いずれも当社の連結子会社になりました。

また、2012年5月、当社の連結子会社である東芝ライテック(株)とハリソン東芝ライティング(株)は、LED照明等の成長事業のさらなる拡大、海外事業強化、次世代照明システムの早期事業化、収益構造の強化を目指し、合併することを決定しました。これに伴い、ハリソン東芝ライティング(株)は、東芝ライテック(株)を存続会社とする吸収合併により、2012年10月に解散する予定です。

## 第2【事業の状況】

### 1【事業等のリスク】

下記に記載の内容を除き、当第1四半期連結累計期間において、新たな事業等のリスクの発生及び前事業年度の第173期有価証券報告書に記載された「事業等のリスク」についての重要な変更はありません。変更点は下線で示しています。なお、変更点の前後について一部省略しています。また、以下の見出しに付された項目番号は、前事業年度の有価証券報告書における「第一部 企業情報 第2事業の状況 4 事業等のリスク」の項目番号に対応したものです。

なお、文中の将来に関する事項は当四半期報告書提出日現在において判断したものです。

(2)財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に係るもの

1) デジタルプロダクツ部門の事業環境

(前略)

しかしながら、アジアを中心とした新興経済地域市場の成長は引き続き堅調であると考えられることから新興経済地域市場を中心に各地域の特性に配慮したローカルフィット商品を継続して展開するとともに、映像とパソコンの技術力を結集した高付加価値商品の販売、さらには、2011年4月に開設した電子書籍ストア「ブックプレイス」をはじめとした様々なサービスの商品化に取り組み、国内外においてハードウェアとサービスの両面で売上規模の拡大を目指していきます。

また、当社は、2012年7月、デジタルプロダクツ部門の収益改善、事業体質強化を目的に、国内拠点の再編・集約による効率化と、成長市場を見据えたグローバルレベルでの開発・生産体制の確立に向けた構造改革の実施を決定しました。具体的には、深谷事業所にあるテレビの設計開発機能を、パソコン、タブレットの設計開発拠点である青梅事業所に集約し、パソコンやタブレットとの融合商品、ローカルフィット商品や付加価値サービス創出に向けた開発の加速を図ります。また、テレビの修理業務の一部を当社の連結子会社である東芝メディア機器㈱に集約し、業務の効率化を図ります。さらに、品質・生産管理業務について青梅事業所から海外各拠点への移管を進めてスピードアップを図るとともに、新興経済地域でのテレビの生産拠点の増強や委託生産の拡大により、コスト競争力のあるグローバルレベルでの生産体制の強化を図ります。

(8)重要な訴訟事件等の発生に係るもの

1) 争訟等

(前略)

2007年1月、欧州委員会は、ガス絶縁開閉装置市場における欧州競争法違反行為があったとして、当社を含む19社に課徴金を賦課することを決定しました。しかし、当社の調査では、当社はかかる欧州競争法に違反する行為を行っておらず、本決定について争うため2007年4月にEU一般裁判所に決定の取消しを求めて訴訟を提起しました。2011年7月、EU一般裁判所の判決が下り、当社に対する課徴金は全て取り消されましたが、欧州競争法違反行為があったとする欧州委員会の決定は支持されました。しかしながら、かかる判決内容は当社の事実認識と異なるため、2011年9月、EU司法裁判所に上訴しました。今後、上訴審において当社の考えを主張していきます。また、2012年6月、欧州委員会は、上述の判決により取り消された課徴金を算定し直し、当社に対し再賦課することを決定しました。この決定による課徴金の額は、当社に対し56.8百万ユーロ、これに加えて三菱電機株式会社と連帯して4.65百万ユーロとなっています。本決定に対する今後の具体的な対応は、EU一般裁判所への提訴も含め、現在検討しています。

さらに、当社グループは、半導体、液晶ディスプレイ、CRT、重電機器、光ディスク装置等の製品について、米国司法省、欧州委員会、その他の競争関係当局から調査を受けているとともに、北米においては集団訴訟が提起されています。

(中略)

米国において、液晶ディスプレイ関連製品の購入者等が当社グループ等に対し、米国競争法違反の

疑いを理由に損害賠償を求める訴訟を提起しており、当社グループはこのうち同製品の間接購入者等とは和解に達しましたが、直接購入者が提起した集団訴訟については、2012年7月、連邦地方裁判所において、違反行為全体に基づく損害を87百万米ドルと認定する陪審の評決が当社グループに対して出されました。当社グループは、液晶ディスプレイ事業において一切の違反行為はなく、違反行為及び損害を認定した評決は不当であると考えているため、今後、当社の主張が認められるよう、あらゆる法的手段を用いて対応を進めていきます。なお、本訴訟における他の被告の和解金額の合計がこの評決に基づき法律により決定される損害賠償額を超えるため、この評決による当社グループの賠償金の支払いはありません。



## 2【経営上の重要な契約等】

### 当第1四半期連結会計期間中に締結した契約

会社名	相手会社名	国/地域名	契約の概要
東芝テック㈱	米国法人IBM社	米国	2012年4月、当社の連結子会社である東芝テック㈱(以下「テック」という。)は、米国法人IBM社(International Business Machines Corporation、以下「IBM社」という。)と同社のリテール・ストア・ソリューション事業を譲り受ける契約を締結しました。(※)

(注)※この契約に基づき、2012年8月、テックとIBM社は米国、カナダ、メキシコ及びオーストラリアの4か国に事業法人を設立し事業を開始しました。今後、他の国・地域においても、新会社を順次設立する予定です。また、日本には持株会社である東芝グローバルコマースソリューション・ホールディングス㈱を設立し事業を開始しました。当該持株会社は、現在その株式の80.1%をテックが、19.9%をIBM社が保有していますが、3年後にはテックが100%子会社にする予定です。この事業取得の対価は、2012年7月に初回の支払(51.0%相当)が実行されており、今後はその支払から1年後(29.1%相当)と3年後(19.9%相当、IBM社の保有株式買取)にそれぞれ支払が実施されます。

### 3【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

以下に記載する事項は、当四半期報告書提出日(2012年8月10日)現在において入手し得る情報に基づいて当社グループが判断したものです。

#### (1) 業績等の概要

売上高	12,689 (△572)
営業損益	115 (+ 74)
継続事業税引前損益	△147 (△178)
四半期純損益	△121 (△126)

(注) 1. 単位：億円、( )内 前年同期比較、△はマイナスを表示(以下、同じ)

2. 「当社株主に帰属する四半期純損益」を四半期純損益として表示しています。

当第1四半期連結累計期間(以下「当期」という。)の世界経済は、新興経済地域の一部で成長鈍化が見られ景気の拡大傾向が縮小していることや、米国における失業率の高止まりや欧州の一部の国々における財政の先行き不安等により、依然として厳しい状況が続いています。国内経済も復興需要等を背景に緩やかな回復傾向にあるものの、海外景気の下振れリスクや電力の供給能力不足等の懸念材料が残っています。

こうした状況下、当社グループの売上高は、エネルギー関連を中心に社会インフラ部門が好調だったものの、円高の継続、市場環境の悪化等によりデジタルプロダクツ部門、電子デバイス部門を中心に減収になり、全体として前年同期比572億円減少し1兆2,689億円になりました。営業損益は、デジタルプロダクツ部門が減益になったものの、電子デバイス部門、社会インフラ部門の増益により、全体として前年同期比74億円増加し115億円になりました。継続事業税引前損益は為替の影響に加え、収益力の強化に向けた事業構造改革の着実な推進に伴う一時費用等の影響により、前年同期比178億円減少し△147億円になり、四半期純損益も前年同期比126億円減少し△121億円になりました。

事業の種類別セグメントの業績は、次のとおりです。

セグメント	売上高	営業損益
デジタルプロダクツ	3,399 (△720 : 83%)	△36 (△ 30)
電子デバイス	3,077 (△254 : 92%)	94 (+ 68)
社会インフラ	5,002 (+733 : 117%)	84 (+116)
家庭電器	1,416 (△ 79 : 95%)	1 (△ 10)
その他	808 (△380 : 68%)	△24 (△ 57)
セグメント間消去	△1,013	△4
合 計	12,689 (△572 : 96%)	115 (+ 74)

(注)単位：億円、( )内 前年同期比較

#### ①デジタルプロダクツ部門

テレビ等の映像事業は、国内で前年同期に地上波デジタル放送への移行に伴う一時的な需要増加があった影響もあり、当期は需要が減少し減収になりました。また、パソコン事業は国内及び欧州において販売台数が伸長したものの、北米における伸び悩み等により減収になりました。これらの結果、部門全体として減収になりました。

損益面では、パソコン事業がコスト削減施策の徹底等により一定の利益水準を確保しましたが、テレビ等の映像事業が構造改革の継続により前年第4四半期から大幅に改善したものの、国内における液晶テレビの需要減少等の影響を受け、部門全体としては前年同期比で悪化しました。

#### ②電子デバイス部門

セミコンダクター&ストレージ事業において、ハードディスク装置を中心にストレージが好調で増収になりましたが、半導体が円高の継続、メモリの価格下落等により減収になった結果、部門全体として減収になりました。

損益面では、半導体がメモリの価格下落の影響はあるもののシステムLSIが構造改革を通じて黒字化を達成したことに加え、ストレージが増収により増益になったことから、部門全体としては増益になりました。

#### ③社会インフラ部門

火力・水力発電システムが国内外において引き続き好調であったことに加え、ランディス・ギア社の買収も寄与し、エネルギー関連を中心に電力・社会インフラシステム事業全体が伸長しました。また、昇降機事業、医用システム事業の増収等もあり、部門全体として増収になりました。

損益面では、円高の影響等はあったものの、国内外における火力・水力発電システムの好調や送変電、太陽光発電の増益等、エネルギー関連を中心に伸長したことに加え、医用システム事業も増益になるなど、部門全体として大幅な増益になり、第1四半期における過去最高の営業利益を達成しました。

#### ④家庭電器部門

空調事業が業務用空調において増収になり、一般照明事業もLED照明を中心に増収になったものの、洗濯機、冷蔵庫の販売数量の減少等の影響により白物家電事業が減収になり、部門全体として減収になりました。

損益面では、白物家電事業の減収の影響を受け、部門全体としては減益になりましたが、空調事業の増収に伴う増益等により黒字を確保しました。

#### ⑤その他部門

2012年3月に液晶ディスプレイ事業を営む子会社であった東芝モバイルディスプレイ(株)の全株式を譲渡したこと等により、部門全体として減収、悪化になりました。

なお、上記の事業の種類別の売上高には、セグメント間の内部売上高又は振替高が含まれていません。

(注) ・四半期連結財務諸表は、米国会計基準に準拠して作成しています。但し、当社グループの営業損益は、売上高から売上原価並びに販売費及び一般管理費を控除して算出したものであり、経営資源の配分の決定及び業績の検討のため、定期的に評価を行う対象となる損益を示しています。事業構造改善費用及び固定資産売却損益等は、当社グループの営業損益には含まれていません。

・モバイル放送(株)及び携帯電話事業は、Accounting Standards Codification (以下「ASC」という。) 205-20「財務諸表の表示-非継続事業」に従い、連結損益計算書上非継続事業として取り扱われるため、売上高、営業損益、継続事業税引前損益にはこれらの事業に係る経営成績は含まれていません。当社グループの四半期純損益は、継続事業税引前損益にこれらの事業に係る経営成績を加減して算出されています。

・2011年度の組織変更等に伴い、セグメント情報における過年度の数値を新組織ベースに組み替えて表示しています。

・なお、以上の定性的情報は、特記のない限り前年同期との比較で記載しています。

## (2) 流動性及び資金の財源

### ① キャッシュ・フロー

当期における営業活動によるキャッシュ・フローは、四半期純損益が悪化したものの、運転資金収支の改善等により、前年同期の118億円の支出から29億円改善し、89億円の支出になりました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、前年同期の813億円の支出から25億円増加し、838億円の支出になりました。

これらの結果、当期のフリー・キャッシュ・フローは、前年同期の931億円の支出から4億円改善し、927億円の支出になりました。

財務活動によるキャッシュ・フローは、短期借入金が増加したこと等により、前年同期の621億円の収入から330億円増加し、951億円の収入になりました。

その他に為替の影響によるキャッシュの減少が84億円あり、当期末の現金及び現金同等物の残高は、前期末の2,143億円から60億円減少し、2,083億円になりました。

The Shaw Group Inc. は、当社との契約に基づき同社の100%子会社が保有しているウェスチングハウス社グループ持株会社の所有持分全部(持株会社株式の20%)について、当該所有持分の全部又は一部を当社に売却することができる権利(以下「プットオプション」という。)が、2012年10月に行使される旨を昨年末に公表しました。このプットオプションが行使された場合、当社グループは新たな戦略的パートナーの出資を求めることとなりますが、当社グループが持分を取得する2013年1月から当該出資がなされるまでの間、一定の資金負担が生じる可能性があります。なお、既にウェスチングハウス社グループへの出資について、関心を寄せていただいている企業もあり、ビジョンや長期的な事業戦略を共有できる場合には、新たな出資パートナーを迎え入れる可能性があります。

### ② 流動性管理と資金調達

#### <流動性管理>

当期末の状況としては、現金及び現金同等物の2,083億円、コミットメントライン未使用枠の3,490億円を合わせ、5,573億円の手許流動性を確保しました。

#### <資金調達>

当社グループは、金利上昇局面への対応及び事業に必要な基本的資産である固定資産の手当てとして、安定的な長期資金をバランスよく調達・確保するよう配慮しています。固定資産については、株主資本・固定負債を含めた長期資金で賄えるよう、長期資金比率の適正化を図っています。

資金調達の直接・間接調達の比率及び長期・短期資金の比率については、資金調達環境等を十分鑑み、バランスの取れた資金構成の維持を基本方針としています。

#### <格付け>

当社は、ムーディーズ・ジャパン(株)(以下「ムーディーズ」という。)、スタンダード&プアーズ・レーティング・ジャパン(株)(以下「S&P」という。)、(株)格付投資情報センター(以下「R&I」という。)の3社から格付けを取得しています。当期末の格付状況(長期/短期)は、ムーディーズ:Baa 2(見通しは安定的)/P-2、S&P:BBB(アウトルックは安定的)/A-2、R&I:A-(格付けの方向性は安定的)/a-1です。

### ③ 資産、負債及び資本の状況

総資産は、2012年3月末に比べ1,831億円減少し、5兆5,696億円になりました。

株主資本は、円高の更なる進行、世界的な株価下落の影響等によりその他の包括損益累計額が減少したこと及び配当の支払があったことにより、2012年3月末に比べ722億円減少し、7,913億円になりました。

借入金・社債残高は、社会インフラ部門の受注増加に伴う資金需要の増加等により、2012年3月

末に比べ1,104億円増加し、1兆3,462億円になりました。

この結果、2012年6月末の株主資本比率は2012年3月末に比べ0.8ポイント減少し、14.2%になり、D/Eレシオ(有利子負債/株主資本)は2012年3月末に比べ27ポイント増加し、170%になりました。

(注)・当社は、2011年7月に行ったランディス・ギア社の買取について、ASC 805「企業結合」に基づき、取得金額の資産及び負債への配分を完了しました。これに伴い、第173期の数値を一部遡及的に組み替えて表示しています。

### (3) 対処すべき課題

当期において、当社グループが対処すべき課題について重要な変更はありません。

#### <株式会社の支配に関する基本方針>

##### 1) 基本方針の内容

当社グループが株主の皆様へ還元する適正な利潤を獲得し、企業価値・株主共同の利益の持続的な向上を実現するためには、株主の皆様はもちろん、お客様、取引先、従業員、地域社会等のステークホルダーとの適切な関係を維持、発展させていくことも必要であり、これらのステークホルダーの利益にも十分配慮した経営を行う必要があると考えています。

また、当社株式の買付の提案を受けた場合に、その買付が当社の企業価値・株主共同の利益に及ぼす影響を適切に判断するためには、各事業分野の有機的結合により実現され得るシナジー効果、当社グループの実情、その他当社の企業価値を構成する要素が十分に把握される必要があると考えます。

当社取締役会は、上記の要素に鑑み、当社の企業価値・株主共同の利益の確保、向上に資さない当社株式の大量取得行為や買付提案を行う者は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として適当ではなく、このような者による当社株式の大量取得行為に関しては、必要かつ相当な手段を採ることにより、当社の企業価値・株主共同の利益を確保する必要があると考えています。

##### 2) 基本方針の実現に資する特別な取組み

当社グループは環境変化に強く高収益な企業体質を確立するための事業構造改革を継続し深化させるとともに、新たな収益基盤の確立に向けた事業構造転換を強力に推進してまいります。

##### 3) 基本方針に照らして不適切な者によって支配されることを防止するための取組み(買収防衛策)

当社は、当社株式の大量取得行為に関する対応策(以下「本プラン」といいます。)を、2006年6月開催の定時株主総会における承認を得て導入し、2009年6月及び2012年6月の定時株主総会における承認を得て更新しています。

本プランは、当社株式の大量買付が行われる場合の手続を明確にし、株主の皆様が適切な判断をするために必要かつ十分な情報と時間を確保するとともに、買付者との交渉の機会を確保することにより、当社の企業価値・株主共同の利益を確保し、向上させることを目的としています。

具体的には、当社の発行済株式総数の20%以上となる株式の買付又は公開買付け等を実施しようとする買付者には、必要な情報を事前に当社取締役会に提出していただきます。当社経営陣から独立した社外取締役のみで構成される特別委員会は、外部専門家等の助言を独自に得て、買付内容の評価・検討、株主の皆様への情報開示と代表執行役の提示した代替案の評価、検討、開示、買付者との交渉等を行います。買付者が本プランの手続を遵守しない場合や、当社の企業価値・株主共同の利益を侵害する買付である場合等で、本プラン所定の発動要件を満たす場合は、対抗措置の発動(買付者等による権利行使は原則として認められない旨の行使条件及び当社が買付者等以外の者から当社株式と引換えに新株予約権を取得できる旨の取得条項を付した新株予約権の無償割当ての実施)がなされ、当社の企業価値・株主共同の利益を確保します。

#### 4) 本プランの特徴(合理性)

当社取締役会は、以下の理由から、本プランが基本方針に沿い、当社の企業価値・株主共同の利益を損なうものではなく、かつ、当社経営陣の地位の維持を目的とするものではないと判断しています。

なお、本プランは、以下のとおり、経済産業省及び法務省が2005年5月27日に発表した企業価値ひいては株主共同の利益の確保又は向上のための買収防衛策に関する指針の定める三原則(①企業価値ひいては株主共同の利益の確保・向上の原則、②事前開示・株主意思の原則、③必要性・相当性の原則)を全て充足しており、また、その後の買収防衛策に関する実務や司法界等の関係機関の議論等を踏まえています。

##### ア. 株主意思の反映

本プランは、2006年6月開催の定時株主総会における承認を得て導入し、2009年6月及び2012年6月開催の定時株主総会における承認を得て更新したものです。

また、当社取締役会は、一定の場合に、本プランの発動の是非について、株主意思確認総会において株主の皆様意思を確認することとしています。

##### イ. 独立性の高い社外者の判断による判断と情報開示

当社は委員会設置会社であり、当社の執行役を監督する立場にある3名以上の独立性のある社外取締役のみからなる特別委員会を構成することにより、当社経営陣の恣意的判断を排し、その客観性、合理性を担保すると同時に、特別委員会は当社の実情を把握し当社の企業価値を構成する要素を十分に把握した上で、対象買付が当社の企業価値・株主共同の利益に及ぼす影響を適切に判断できると考えています。

更に、特別委員会の判断の透明性を高めるため、買付者から提出された買付説明書の概要、買付者の買付内容に対する当社代表執行役の意見、代替案の概要、その他特別委員会が適切と判断する事項について、原則として株主の皆様に対し速やかに情報開示を行います。

##### ウ. 本プラン発動のための合理的な客観的要件の設定

本プランは、あらかじめ定められた合理的な客観的要件が充足されなければ発動されないように設定されています。これにより、当社の会社役員による恣意的な発動を防止します。

##### エ. 第三者専門家の意見の取得

特別委員会は、当社の費用で、独立した第三者(ファイナンシャル・アドバイザー、公認会計士、弁護士、税理士、コンサルタントその他の専門家を含みます。)の助言を得ることができます。これにより、特別委員会による判断の公正さ、客観性がより強く担保されます。

(注) 以上は買収防衛策の概要ですので、詳しい内容については当社ウェブサイト

([http://www.toshiba.co.jp/about/ir/jp/news/20120508\\_1.pdf](http://www.toshiba.co.jp/about/ir/jp/news/20120508_1.pdf))をご参照ください。

#### (4) 研究開発活動

当期における研究開発費は670億円でした。

研究開発の主な状況は、以下のとおりです。

発電と同時に二酸化炭素の分離・回収を行い、窒素酸化物を排出しないゼロエミッションの新火力発電システムを米国法人のNET Power LLC、The Shaw Group Inc.、Exelon Corporationと共同開発することに合意しました。環境調和性の高い本システムを開発することで、エネルギーの最適活用及び地球温暖化防止に貢献していきます。

なお、当期における主要な研究開発成果は以下のとおりです。

##### ① 新商品開発の成果

- ・19nmプロセス技術によるNAND型フラッシュメモリを用いたパソコン向けSSDを世界で初めて(※1)商品化しました。当社独自の高速化技術により、従来製品に比べ2.2倍以上の読み出し速度と、2.4倍以上の書き込み速度を実現するとともに、電源制御技術により、世界最高水準(※1)の低消費電力を実現しました。
- ・次世代全身用X線診断装置「Area Detector CT Aquilion ONE™/ Vision Edition」を商品化しました。本商品は、160mmの範囲を1回転0.275秒の高速で撮影することで、心拍数が1分間に75回の患者まで診断可能となった結果、小児等を含め心臓CT検査の適応範囲を拡大させるとともに検査精度を向上させました。また、当社独自の低線量撮影技術AIDR 3D(Adaptive Iterative Dose Reduction 3D)により、被ばく線量を最大75%低減しました。

##### ② 研究開発の成果

- ・LEDに続く次世代照明として注目される有機EL照明について、電子移動度が高い電子輸送層と、光の反射率の高い陰極材料を導入し、また、大きな面積で均一発光を実現する補助配線構造を採用し、世界最高レベルの発光効率91lm/W(※2)の有機ELパネル(発光面積7cm角)を開発しました。

(注) ※1：2012年6月現在、当社調べ。

※2：輝度1,000 cd/m<sup>2</sup>、色温度は3010K時の発光効率。

なお、2012年7月、欧州合同原子核研究機関(CERN)は、物の質量の起源とされる「ヒッグス粒子」と見られる新しい粒子を発見したと発表しました。当社は、この発見に使用された「大型ハドロン衝突型加速器(LHC)」の重要な装置である、粒子検出用超伝導ソレノイドコイル(2001年納入)と、陽子ビームを絞り込む超伝導4極電磁石(2004年納入)を納入し、本発見に貢献しました。

#### (5) 生産、受注及び販売の実績

当期において、当社グループの生産、受注及び販売の実績に著しい変動はありません。

なお、当社の主要製品であるNAND型フラッシュメモリについては、2012年7月以降、当社四日市工場において、USB・カード市場向け製品を中心に生産量を3割削減する生産調整を行ってまいります。これにより、当社製品の在庫圧縮による需給バランスの改善を早めるとともに、高付加価値製品及び19nmプロセス技術を用いた製品の生産割合を高め、プロダクトミックスの改善とコスト競争力の強化を図ります。

#### (6) 主要な設備

前連結会計年度末に計画した重要な設備の新設、除却等について、重要な変更はありません。また、新たに確定した重要な設備の新設、拡充、改修、除却、売却等の計画はありません。

### 第3【提出会社の状況】

#### 1【株式等の状況】

##### (1)【株式の総数等】

###### ①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	10,000,000,000
計	10,000,000,000

###### ②【発行済株式】

種類	第1四半期会計期間 末現在発行数(株) (2012年6月30日)	提出日現在 発行数(株) (2012年8月10日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	4,237,602,026	4,237,602,026	東京、大阪、名古屋、 ロンドンの各 証券取引所 (東京、大阪、名古屋は市場第一部)	単元株式数 1,000株
計	4,237,602,026	4,237,602,026	—	—

##### (2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

##### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

##### (4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### (5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2012年4月1日～ 2012年6月30日	—	4,237,602,026	—	439,901	—	0

##### (6)【大株主の状況】

当四半期会計期間は第1四半期会計期間であるため、記載事項はありません。



## (7) 【議決権の状況】

## ① 【発行済株式】

2012年6月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 2,660,000	—	単元株式数1,000株
	(相互保有株式) 普通株式 —	—	—
完全議決権株式(その他)※1	普通株式 4,216,174,000	4,216,174	単元株式数1,000株
単元未満株式※2	普通株式 18,768,026	—	—
発行済株式総数	4,237,602,026	—	—
総株主の議決権	—	4,216,174	—

(注) ※1. 上記「完全議決権株式(その他)」の中には、(株)証券保管振替機構名義の株式が24千株(議決権24個)が含まれています。

※2. 上記「単元未満株式」の中には当社所有の自己株式285株が含まれています。

## ② 【自己株式等】

2012年6月30日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合(%)
(株)東芝	東京都港区芝浦 一丁目1番1号	2,660,000	—	2,660,000	0.06
計	—	2,660,000	—	2,660,000	0.06

## 2【役員の状況】

前事業年度の有価証券報告書提出日後、当第1四半期累計期間における役員の異動はありません。

## 第4【経理の状況】

### 1. 四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成23年内閣府令第44号）第3条の規定による改正後の「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」附則第4条の規定により、米国において一般に公正妥当と認められた会計基準による用語、様式及び作成方法に準拠して作成しています。ただし、Accounting Standards Codification(以下「ASC」という。) 810「連結」に基づく変動持分事業体及びASC 860「譲渡及びサービス業務」に基づく証券化取引の注記については省略しています。

### 2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、当第1四半期連結会計期間(2012年4月1日から2012年6月30日まで)及び当第1四半期連結累計期間(2012年4月1日から2012年6月30日まで)に係る四半期連結財務諸表について、新日本有限責任監査法人による四半期レビューを受けています。

# 1【四半期連結財務諸表】

## (1)【四半期連結貸借対照表】

区分	注記 番号	2011年度の 連結貸借対照表 (2012年3月31日現在)		2012年度第1四半期 (2012年6月30日現在)		
		金額(百万円)	構成比 (%)	金額(百万円)	構成比 (%)	
(資産の部)						
I 流動資産						
1. 現金及び現金同等物			214,305		208,320	
2. 受取手形及び売掛金						
(1) 受取手形		43,800		40,138		
(2) 売掛金		1,283,485		1,039,156		
(3) 貸倒引当金		△19,651	1,307,634	△18,575	1,060,719	
3. 棚卸資産	6		884,187		996,972	
4. 短期繰延税金資産	9		146,825		156,166	
5. 未収入金			202,649		164,234	
6. 前払費用及び その他の流動資産	4及び 12		253,913		283,251	
流動資産合計			3,009,513	52.3	2,869,662	51.5
II 長期債権及び投資						
1. 長期受取債権			49,164		46,575	
2. 関連会社に対する投資 及び貸付金			414,542		412,246	
3. 投資有価証券及び その他の投資	4及び 5		237,519		222,946	
長期債権及び投資合計			701,225	12.2	681,767	12.2
III 有形固定資産						
1. 土地			100,029		98,821	
2. 建物及び構築物			940,935		932,032	
3. 機械装置及び その他の有形固定資産			2,132,059		2,106,292	
4. 建設仮勘定			79,006		81,460	
			3,252,029		3,218,605	
5. 減価償却累計額			△2,400,664		△2,373,343	
有形固定資産合計			851,365	14.8	845,262	15.2
IV その他の資産						
1. のれん及び その他の無形資産			723,577		698,144	
2. 長期繰延税金資産	9		378,474		381,542	
3. その他			88,583		93,201	
その他の資産合計			1,190,634	20.7	1,172,887	21.1
資産合計			5,752,737	100.0	5,569,578	100.0

区分	注記 番号	2011年度の 連結貸借対照表 (2012年3月31日現在)		2012年度第1四半期 (2012年6月30日現在)	
		金額(百万円)	構成比 (%)	金額(百万円)	構成比 (%)
(負債の部)					
I 流動負債					
1. 短期借入金		119,515		234,626	
2. 1年以内に期限の到来 する社債及び長期借入金	12	206,626		209,632	
3. 支払手形及び買掛金		1,293,028		1,100,579	
4. 未払金及び未払費用		394,707		421,148	
5. 未払法人税等及び その他の未払税金		46,536		34,334	
6. 前受金		271,874		274,375	
7. その他の流動負債	4,12 及び14	337,276		310,664	
流動負債合計		2,669,562	46.4	2,585,358	46.4
II 固定負債					
1. 社債及び長期借入金	12	909,620		901,982	
2. 未払退職及び年金費用	7	779,414		772,841	
3. その他の固定負債	4及び 12	163,930		158,614	
固定負債合計		1,852,964	32.2	1,833,437	32.9
負債合計		4,522,526	78.6	4,418,795	79.3
(資本の部)					
I 株主資本					
1. 資本金					
発行可能株式総数 10,000,000,000株					
発行済株式数					
2012年3月31日及び 2012年6月30日					
		439,901	7.6	439,901	7.9
4,237,602,026株					
2. 資本剰余金		401,125	7.0	401,228	7.2
3. 利益剰余金		591,932	10.3	562,643	10.1
4. その他の包括損失累計額		△567,979	△9.9	△610,963	△11.0
5. 自己株式(取得原価)					
2012年3月31日 2,636,058株					
2012年6月30日 2,660,285株					
株主資本合計		863,481	15.0	791,305	14.2
II 非支配持分					
資本合計		366,730	6.4	359,478	6.5
資本合計		1,230,211	21.4	1,150,783	20.7
契約債務及び偶発債務	13,14 及び15				
負債及び資本合計		5,752,737	100.0	5,569,578	100.0

(2) 【四半期連結損益計算書】  
【第1四半期連結累計期間】

区分	注記 番号	2011年度 第1四半期連結累計期間 (自 2011年4月1日 至 2011年6月30日)		2012年度 第1四半期連結累計期間 (自 2012年4月1日 至 2012年6月30日)	
		金額(百万円)	百分比 (%)	金額(百万円)	百分比 (%)
I 売上高及びその他の収益					
1. 売上高		1,326,105	100.0	1,268,863	100.0
2. 受取利息及び配当金		2,250	0.2	2,406	0.2
3. 持分法による投資利益		4,162	0.3	2,281	0.2
4. その他の収益	8及び 12	15,296	1.1	5,230	0.4
		1,347,813	101.6	1,278,780	100.8
II 売上原価及び費用					
1. 売上原価		1,015,321	76.6	967,744	76.3
2. 販売費及び一般管理費		306,663	23.1	289,648	22.8
3. 支払利息		7,226	0.5	8,193	0.7
4. その他の費用	8及び 12	15,457	1.2	27,854	2.2
		1,344,667	101.4	1,293,439	102.0
III 継続事業からの税金等調整前 四半期純利益(△損失)		3,146	0.2	△14,659	△1.2
IV 法人税等	9	1,063	0.1	△4,453	△0.4
V 継続事業からの非支配持分控除前 四半期純利益(△損失)		2,083	0.1	△10,206	△0.8
VI 非継続事業からの非支配持分控除前 四半期純利益(税効果後)	3	41	0.0	0	0.0
VII 非支配持分控除前 四半期純利益(△損失)		2,124	0.1	△10,206	△0.8
VIII 非支配持分に帰属する 四半期純損益(控除)		1,654	0.1	1,899	0.2
IX 当社株主に帰属する四半期純利益(△損失)		470	0.0	△12,105	△1.0
1株当たり情報 (単位:円)					
1. 基本的1株当たり 当社株主に帰属する四半期純利益(△損失)	11				
継続事業からの四半期純利益(△損失)		0.10		△2.86	
非継続事業からの四半期純利益		0.01		0.00	
四半期純利益(△損失)		0.11		△2.86	
2. 希薄化後1株当たり 当社株主に帰属する四半期純利益(△損失)	11				
継続事業からの四半期純利益(△損失)		0.10		△2.86	
非継続事業からの四半期純利益		0.01		0.00	
四半期純利益(△損失)		0.11		△2.86	
3. 配当金		—		—	

## (3) 【四半期連結包括損益計算書】

## 【第1四半期連結累計期間】

		2011年度 第1四半期連結累計期間 (自 2011年4月1日 至 2011年6月30日)	2012年度 第1四半期連結累計期間 (自 2012年4月1日 至 2012年6月30日)
区分	注記 番号	金額(百万円)	金額(百万円)
I 非支配持分控除前 四半期純利益(△損失)		2,124	△10,206
II その他の包括利益(△損失)、 税効果控除後	10		
1. 未実現有価証券評価損益		202	△10,331
2. 外貨換算調整額		△20,079	△50,285
3. 年金負債調整額		6,182	5,378
4. 未実現デリバティブ評価損益		△605	270
その他の包括損失合計		△14,300	△54,968
非支配持分控除前 四半期包括損失		△12,176	△65,174
III 非支配持分に帰属する 四半期包括損益(控除)		△3,613	△10,085
当社株主に帰属する 四半期包括損失		△8,563	△55,089

## (4) 【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

区分	2011年度 第1四半期連結累計期間 (自 2011年4月1日 至 2011年6月30日)		2012年度 第1四半期連結累計期間 (自 2012年4月1日 至 2012年6月30日)	
	金額(百万円)		金額(百万円)	
I 営業活動によるキャッシュ・フロー				
1. 非支配持分控除前四半期純利益(△損失)		2,124		△10,206
2. 営業活動により減少したキャッシュ(純額)への調整				
(1) 有形固定資産の減価償却費及び無形資産の償却費	55,251		47,973	
(2) 未払退職及び年金費用(退職金支払額差引後)	3,944		3,733	
(3) 繰延税金	△7,723		△13,728	
(4) 持分法による投資損益(受取配当金相殺後)	△1,784		3,688	
(5) 有形固定資産及び無形資産の除売却損益及び減損、純額	△6,678		1,972	
(6) 投資有価証券の売却損益及び評価損、純額	646		△413	
(7) 受取債権の減少	114,520		226,769	
(8) 棚卸資産の増加	△135,185		△125,985	
(9) 支払債務の減少	△6,945		△166,555	
(10) 未払法人税等及びその他の未払税金の減少	△16,013		△10,991	
(11) 前受金の増加	9,512		9,980	
(12) その他	△23,486	△13,941	24,814	1,257
営業活動により減少したキャッシュ(純額)		△11,817		△8,949
II 投資活動によるキャッシュ・フロー				
1. 有形固定資産及び無形資産の売却収入		57,806		5,588
2. 投資有価証券の売却収入		50		1,002
3. 有形固定資産の購入		△100,419		△80,380
4. 無形資産の購入		△10,306		△4,976
5. 投資有価証券の購入		△3,546		△3,910
6. 関連会社に対する投資等の増加		△9,178		△3,074
7. その他		△15,733		2,023
投資活動により減少したキャッシュ(純額)		△81,326		△83,727
III 財務活動によるキャッシュ・フロー				
1. 長期借入金の借入		1,705		529
2. 長期借入金の返済		△12,530		△3,864
3. 短期借入金の増加		85,982		115,182
4. 配当金の支払		△13,413		△16,733
5. 自己株式の取得、純額		△10		△8
6. その他		381		△26
財務活動により増加したキャッシュ(純額)		62,115		95,080
IV 為替変動の現金及び現金同等物への影響額		△3,574		△8,389
V 現金及び現金同等物純減少額		△34,602		△5,985
VI 現金及び現金同等物期首残高		258,840		214,305
VII 現金及び現金同等物四半期末残高		224,238		208,320



## 四半期連結財務諸表に対する注記

### 1. 会計処理の原則及び手続並びに四半期連結財務諸表の表示方法

当社の四半期連結財務諸表は、米国において一般に公正妥当と認められた企業会計の基準及び会計慣行に従っています。ただし、Accounting Standards Codification(以下「ASC」という。) 810「連結」に基づく変動持分事業体及びASC 860「譲渡及びサービス業務」に基づく証券化取引の注記については省略しています。

当社は、1962年2月に米国預託証券を発行し、1970年2月に欧州預託証券を発行しました。これらに際し、米国預託証券の発行等に関して要請されている用語、様式及び作成方法により作成した連結財務諸表(以下「米国式連結財務諸表」という。)を作成し、かつ、これを開示してきたことを事由として、1978年3月22日に「連結財務諸表規則取扱要領第86に基づく承認申請書」を大蔵大臣へ提出し、同年3月31日付蔵証第494号により承認を受けています。その後も継続して米国式連結財務諸表を作成し、かつ、これを開示しています。

当社は、米国預託証券の発行により1962年2月に米国証券取引委員会に登録しましたが、1978年11月に預託契約が終結したため、現在は登録していません。

当社がこの四半期連結財務諸表作成のために採用した会計処理の原則及び手続並びに四半期連結財務諸表の表示方法のうち、わが国における会計処理の原則及び手続並びに表示方法と異なるもので重要性のあるものは以下のとおりです。

なお、四半期連結財務諸表に対する注記において、原則として、「当社」という用語は「㈱東芝」を表し、「当社グループ」という用語は「㈱東芝及び連結子会社」を表すものとして用います。

#### 1) 四半期連結損益計算書の様式

四半期連結損益計算書の様式は、単純計算方式(総収益から総原価及び総費用を控除して損益を示す様式)を採用しています。

#### 2) 未払退職及び年金費用

ASC 715「報酬－退職給付」に基づき未払退職及び年金費用を計上し、退職給付制度の清算及び縮小並びに厚生年金の代行部分の返上の会計処理を行っています。

これらの会計処理による継続事業からの税金等調整前四半期純利益(損失)に対する影響額は、2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間において、それぞれ3,514百万円(利益)及び1,641百万円(利益)です。

#### 3) 有給休暇引当金

ASC 710「報酬－全般」に基づき、従業員の未消化有給休暇に対応する人件費相当額を未払費用として計上しています。

#### 4) のれん及びその他の無形資産

ASC 350「無形資産－のれん及びその他」(以下「ASC 350」という。)に基づき、のれん及び耐用年数が確定できない無形資産について、償却をしないかわりに少なくとも1年に一度は減損のテストを行っています。

#### 5) 非継続事業

ASC 205-20「財務諸表の表示－非継続事業」(以下「ASC 205-20」という。)に基づき、非継続事業に係る経営成績を四半期連結損益計算書上、非継続事業として区分表示しています。なお、非継続事業に関する開示を注記3.にて行っています。

#### 6) 新株発行費

新株発行費は、税効果考慮後の金額を資本剰余金から控除しています。

## 2. 主要な会計方針の要約

### 1) 四半期特有の会計処理

#### 法人税等の計算

当社は、法人税等について、2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間を含む連結会計年度の継続事業からの税金等調整前当期純利益(損失)に対する税効果会計適用後の実効税率を合理的に見積り、2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間の継続事業からの税金等調整前四半期純利益(損失)に当該見積実効税率を乗じて計算しています。

### 2) 新会計基準

2012年4月1日より開始する連結会計年度から「Accounting Standards Updates」(以下「ASU」という。)2011-05が適用になりました。ASU 2011-05は、ASC 220「包括利益」を改訂し、その他の包括利益の表示方法として、連結資本勘定計算書で表示する選択肢を削除し、一連の1つの計算書または連続した2つの計算書のいずれかで表示することを要求しています。当社においては、2つの計算書で表示することを選択し、当期より連結包括損益計算書を開示しております。ASU 2011-05の適用が当社の財政状態及び経営成績に与える影響はありません。

2012年4月1日より開始する連結会計年度からASU 2011-08が適用になりました。ASU 2011-08は、ASC 350を改訂し、2つのステップののれんの減損テストを実施する必要があるかを判断するために、定性的評価を実施する選択肢を認めています。ASU 2011-08の適用が当社の連結財務諸表に与える影響はありません。

### 3) 組替再表示

2011年度第1四半期連結累計期間及び2011年度の連結財務諸表については、2012年度第1四半期連結累計期間の表示方法に合わせて組み替えて表示しています。

### 3. 非継続事業

当社と富士通株式会社(以下「富士通」という。)は、国内外で競争の激化する携帯電話市場において、これまでのノウハウや技術力を結集することで開発力の強化を図るとともに事業の効率性を高めることを目的とし、2010年6月17日付で携帯電話事業の統合に関して基本合意し、2010年7月29日に最終契約を締結しました。この最終契約に基づき、当社は、2010年10月1日付で、携帯電話事業を新会社(富士通東芝モバイルコミュニケーションズ株式会社)に譲渡し、新会社の株式の80.1%を富士通に譲渡しました。また、2012年4月1日付で、当社が保有していた新会社の株式の19.9%を富士通に譲渡しました。本譲渡に伴い新会社の全株式の譲渡が完了しました。

富士通との携帯電話事業の統合に関する契約により、当社が既存機種製造供給を行っていましたが、2011年度第2四半期連結会計期間に既存機種製造供給を完了しました。また、当社が製造供給を行った製品の保守サービスは継続しています。

ASC 205-20に従い、携帯電話事業に係る経営成績を四半期連結損益計算書上、非継続事業として区分表示しています。

非継続事業として組み替えて表示された携帯電話事業に係る経営成績は以下のとおりです。2012年度第1四半期連結累計期間において、これらの金額に重要性はありません。

	(単位：百万円)
	2011年度 第1四半期連結累計期間
売上高及びその他の収益	11,670
売上原価及び費用	11,633
非継続事業からの税金等調整前 四半期純利益	37
法人税等	15
非継続事業からの非支配持分控除前 四半期純利益(税効果後)	22
非継続事業からの非支配持分に帰属する 四半期純損益(控除)	—
非継続事業からの当社株主に帰属する 四半期純利益	22

当社の連結子会社であるモバイル放送株式会社(以下「モバイル放送」という。)は、2009年3月末までに全ての放送サービスを終了し、現在、解散に向けて諸手続きを行っています。ASC 205-20に従い、モバイル放送に係る経営成績を四半期連結損益計算書上、非継続事業として区分表示しています。これらの金額に重要性はありません。

#### 4. 公正価値の測定

ASC 820「公正価値測定」は、公正価値を、市場参加者との通常取引において、資産の売却の対価として受け取る価格、または負債の移転の対価として支払われるであろう価格と定義しています。また、公正価値測定に使用するインプットは、その内容に応じてレベル1からレベル3までの優先順位が以下のとおり設定されています。

- レベル1 - 活発な市場における同一の資産または負債の市場価格
- レベル2 - 活発な市場における類似した資産または負債の市場価格  
活発でない市場における同一または類似した資産または負債の市場価格  
観察可能な市場価格以外のインプット  
相関関係またはその他の手法による観察可能な市場データに基づいたインプット
- レベル3 - 観察可能な市場データによる裏付けがない観察不能なインプット

#### 継続的に公正価値により評価される資産及び負債

2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、継続的に公正価値により評価される資産及び負債の内容は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	2012年3月31日現在			合計
	レベル1	レベル2	レベル3	
資産：				
投資有価証券：				
持分証券	174,388	428	—	174,816
負債証券	—	—	3,067	3,067
金融派生商品：				
先物為替予約	—	4,609	—	4,609
資産合計	<u>174,388</u>	<u>5,037</u>	<u>3,067</u>	<u>182,492</u>
負債：				
金融派生商品：				
先物為替予約	—	5,908	—	5,908
金利スワップ契約	—	1,663	—	1,663
通貨スワップ契約	—	465	—	465
負債合計	<u>—</u>	<u>8,036</u>	<u>—</u>	<u>8,036</u>

(単位：百万円)

2012年6月30日現在

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
資産：				
投資有価証券：				
持分証券	160,196	377	—	160,573
負債証券	—	—	3,179	3,179
金融派生商品：				
先物為替予約	—	5,193	—	5,193
通貨スワップ契約	—	27	—	27
通貨オプション	—	393	—	393
資産合計	160,196	5,990	3,179	169,365
負債：				
金融派生商品：				
先物為替予約	—	1,465	—	1,465
金利スワップ契約	—	2,503	—	2,503
通貨スワップ契約	—	1,189	—	1,189
通貨オプション	—	270	—	270
負債合計	—	5,427	—	5,427

#### 投資有価証券

レベル1には市場性のある有価証券が含まれ、これらは十分な取引量と頻繁な取引のある活発な市場における市場価格により公正価値を評価しています。レベル2にはレベル1に比べ取引量の少ない市場に上場している有価証券が含まれ、これらは活発でない市場における市場価格により公正価値を評価しています。また、レベル3には社債が含まれ、これらは測定日において市場が活発でないため、観察不能なインプットにより公正価値を評価しています。

#### 金融派生商品

金融派生商品には主に為替予約や金利スワップ等が含まれ、レベル2に分類しています。これらは、外国為替レート及びLIBOR等の観察可能な市場データを利用して公正価値を評価しています。

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間において、レベル3に分類された継続的に公正価値により評価される資産の変動額は以下のとおりです。

	(単位：百万円)
	2011年度
	第1四半期連結累計期間
	投資有価証券
期首残高	5
損益合計(実現または未実現)：	
その他の包括利益(△損失)：	
未実現有価証券評価損益	△11
購入	3,054
売却	—
発行	—
決済	—
四半期末残高	3,048

	(単位：百万円)
	2012年度
	第1四半期連結累計期間
	投資有価証券
期首残高	3,067
損益合計(実現または未実現)：	
その他の包括利益(△損失)：	
未実現有価証券評価損益	△81
購入	3,255
売却	—
発行	—
決済	△3,062
四半期末残高	3,179

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間において、レベル3に分類された継続的に公正価値で評価される資産の内容は、社債です。

#### 非継続的に公正価値により評価される資産及び負債

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間において、非継続的に公正価値により評価された資産及び負債に重要性はありません。

## 5. 投資有価証券及びその他の投資

2012年3月31日及び2012年6月30日現在における売却可能有価証券に分類された市場性のある持分証券及び負債証券の取得価額、未実現保有総利益及び総損失並びに公正価値の総額は以下のとおりです。

(単位：百万円)

2012年3月31日現在				
	取得価額	未実現保有総利益	未実現保有総損失	公正価値
持分証券	76,682	99,957	1,823	174,816
負債証券	3,210	0	143	3,067
	<u>79,892</u>	<u>99,957</u>	<u>1,966</u>	<u>177,883</u>

(単位：百万円)

2012年6月30日現在				
	取得価額	未実現保有総利益	未実現保有総損失	公正価値
持分証券	76,576	88,335	4,338	160,573
負債証券	3,260	0	81	3,179
	<u>79,836</u>	<u>88,335</u>	<u>4,419</u>	<u>163,752</u>

2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、負債証券の主な内容は社債です。

2012年6月30日現在において、売却可能有価証券に分類された負債証券の満期別内訳は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	取得価額	公正価値
1年以内	0	0
1年超5年以内	5	5
5年超10年以内	3,255	3,174
	<u>3,260</u>	<u>3,179</u>

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間において、売却可能有価証券の売却額、売却総利益及び売却総損失の金額に重要性はありません。

2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、未実現損失が12ヶ月以上継続的に生じている売却可能有価証券の原価及び公正価値に重要性はありません。

2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、原価法により評価される市場性のない有価証券に対する投資額は、それぞれ52,780百万円及び52,955百万円です。

2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、上記投資額のうち減損の評価を行っていない投資の簿価は、それぞれ49,550百万円及び49,738百万円です。減損の評価を行わなかったのは、投資の公正価値を見積ることが実務上困難なこと、及び投資の公正価値に著しく不利な影響を及ぼす事象や状況の変化が見られなかったためです。

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間において、市場性のある持分証券及び市場性のない持分証券の一時的でない公正価値の下落に係る評価損の金額に重要性はありません。

## 6. 棚卸資産

2012年3月31日及び2012年6月30日現在における棚卸資産の内容は、以下のとおりです。

(単位：百万円)

	2012年3月31日現在	2012年6月30日現在
製品	299,267	352,952
仕掛品	411,221	471,409
原材料	173,699	172,611
	<u>884,187</u>	<u>996,972</u>

## 7. 未払退職及び年金費用

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における期間純退職及び年金費用の内容は、以下のとおりです。

(単位：百万円)

	2011年度 第1四半期連結累計期間	2012年度 第1四半期連結累計期間
期間純退職及び年金費用の構成項目		
勤務費用	13,046	13,302
予測給付債務に対する利息費用	9,559	8,640
年金資産の期待収益	△5,623	△5,891
過去勤務費用償却額	△901	△889
認識された保険数理上の損失	8,394	9,365
期間純退職及び年金費用	<u>24,475</u>	<u>24,527</u>

## 8. その他の収益及びその他の費用

### 為替換算差損益

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における為替換算差損益は、それぞれ2,325百万円(損失)及び10,182百万円(損失)です。

### 固定資産売却損益

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における固定資産売却損益は、それぞれ6,684百万円(利益)及び1,967百万円(損失)です。2011年度第1四半期連結累計期間においては、固定資産売却益9,006百万円及び固定資産売却損2,322百万円が計上されています。2012年度第1四半期連結累計期間においては、固定資産売却益183百万円及び固定資産売却損2,150百万円が計上されています。

## 9. 法人税等

当社の当連結会計年度における法定実効税率は38.0%です。2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における四半期連結損益計算書上の継続事業に係る見積実効税率は、それぞれ33.8%及び30.4%です。2012年度第1四半期連結累計期間における法定実効税率と見積実効税率との乖離は、税負担率の低い海外子会社の影響等によるものです。



## 10. 資本の部

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における株主資本及び非支配持分の変動額は、以下のとおりです。

(単位：百万円)

	株主資本	非支配持分	資本合計
2011年3月31日現在残高	868,119	311,497	1,179,616
非支配持分との資本取引及びその他	△7	737	730
当社株主への配当金	△12,705	—	△12,705
非支配持分への配当金	—	△2,267	△2,267
四半期包括損失：			
四半期純利益	470	1,654	2,124
その他の包括利益(△損失)、			
税効果控除後：			
未実現有価証券評価損益	△225	427	202
外貨換算調整額	△14,641	△5,438	△20,079
年金負債調整額	6,040	142	6,182
未実現デリバティブ評価損益	△207	△398	△605
四半期包括損失	△8,563	△3,613	△12,176
自己株式の取得及び処分(純額)	△9	—	△9
2011年6月30日現在残高	846,835	306,354	1,153,189

(単位：百万円)

	株主資本	非支配持分	資本合計
2012年3月31日現在残高	863,481	366,730	1,230,211
非支配持分との資本取引及びその他	△142	3,426	3,284
当社株主への配当金	△16,939	—	△16,939
非支配持分への配当金	—	△593	△593
四半期包括損失：			
四半期純利益(△損失)	△12,105	1,899	△10,206
その他の包括利益(△損失)、			
税効果控除後：			
未実現有価証券評価損益	△9,796	△535	△10,331
外貨換算調整額	△39,082	△11,203	△50,285
年金負債調整額	5,696	△318	5,378
未実現デリバティブ評価損益	198	72	270
四半期包括損失	△55,089	△10,085	△65,174
自己株式の取得及び処分(純額)	△6	—	△6
2012年6月30日現在残高	791,305	359,478	1,150,783

## 11. 1株当たり当社株主に帰属する四半期純利益(損失)

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における継続事業からの当社株主に帰属する四半期純利益(損失)、非継続事業からの当社株主に帰属する四半期純利益及び当社株主に帰属する四半期純利益(損失)に関する基本的及び希薄化後1株当たり四半期純利益(損失)の計算における分子と分母の調整表は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	2011年度第1四半期 連結累計期間	2012年度第1四半期 連結累計期間
継続事業からの当社株主に帰属する 四半期純利益(△損失)	419	△12,105
非継続事業からの当社株主に帰属する 四半期純利益	51	0
当社株主に帰属する四半期純利益(△損失)	470	△12,105
		(単位：千株)
	2011年度第1四半期 連結累計期間	2012年度第1四半期 連結累計期間
加重平均発行済普通株式数	4,235,072	4,234,954
希薄化効果のある転換社債型新株予約権付社債の 転換に伴う追加株式数	175,295	—
希薄化後加重平均発行済普通株式数	4,410,367	4,234,954
		(単位：円)
	2011年度第1四半期 連結累計期間	2012年度第1四半期 連結累計期間
基本的1株当たり継続事業からの 当社株主に帰属する四半期純利益(△損失)	0.10	△2.86
希薄化後1株当たり継続事業からの 当社株主に帰属する四半期純利益(△損失)	0.10	△2.86
基本的1株当たり非継続事業からの 当社株主に帰属する四半期純利益	0.01	0.00
希薄化後1株当たり非継続事業からの 当社株主に帰属する四半期純利益	0.01	0.00
基本的1株当たり当社株主に帰属する 四半期純利益(△損失)	0.11	△2.86
希薄化後1株当たり当社株主に帰属する 四半期純利益(△損失)	0.11	△2.86

## 12. 金融商品

### (1) 金融派生商品

当社グループは国際的に事業を営んでいるため、外国為替レート及び金利の変動による市場リスクがあります。当社グループは通常のリスク管理の一環として、主に先物為替予約、金利スワップ契約、通貨スワップ契約及び通貨オプションといった様々な金融派生商品をリスクを軽減するために利用しています。当社グループは、金融派生商品のリスク管理、承認、報告及び監視に係る方針及び規程を有しています。当社グループの方針はトレーディング目的の金融派生商品の保有または発行を禁止しています。

当社グループは金融派生商品取引の契約相手先による契約不履行の場合に生ずる信用リスクにさらされていますが、当社グループの金融派生商品取引の契約相手先は主として信用力の高い金融機関であり、かつ相手先を多数に分散しています。したがって金融派生商品取引の契約相手先の契約不履行による損失の発生はほとんどないと考えています。

当社グループは、外貨建資産及び負債に係る為替相場変動のヘッジを目的とした先物為替予約を金融機関と行っています。外貨建売掛金及び買掛金並びに将来の外貨建取引契約に関連する先物為替予約は、主として期末後数年以内に期限が到来します。

金利スワップ契約、通貨スワップ契約及び通貨オプションは、対応する社債及び借入金並びに外貨建売掛金及び買掛金に関連して外国為替レート及び金利の変動から生ずる当社グループの損失発生リスクを限定する目的で締結されます。これらの契約は2012年から2018年の間に期限が到来します。

先物為替予約、金利スワップ契約、通貨スワップ契約及び通貨オプションは、下記のとおり、一部を除いて、外貨建売掛金及び買掛金あるいは将来取引に係る契約及びヘッジ対象となる社債及び借入金の金利の性格に従い、公正価値ヘッジもしくはキャッシュ・フローヘッジのいずれかに指定されます。

#### 公正価値ヘッジ

当社グループが利用する先物為替予約及び通貨スワップ契約は、外貨建売掛金及び買掛金の公正価値の変動を減少させるのに有効です。

当社グループが利用する金利スワップ契約は、社債及び借入金の固定金利部分を変動金利相当に変更するのに有効です。

公正価値ヘッジとして指定されたデリバティブの公正価値の変動額は、ヘッジ対象の帳簿価格の変動額と相殺されるため、損益に与える影響はありません。

#### キャッシュ・フローヘッジ

当社グループが利用する先物為替予約及び通貨オプションは、それぞれ向こう6年間及び3年間にわたり将来の外貨建取引契約から生ずるキャッシュ・フローの変動を減少させるのに有効です。

当社グループが利用する金利スワップ契約は、向こう6年間にわたり社債及び借入金の変動金利部分を固定金利相当に変更するのに有効です。

当社グループは、今後12ヶ月間に外貨建売掛金の回収及び外貨建買掛金の支払い並びに変動金利付債務の利払いに応じて、金融派生商品に係る利益純額871百万円がその他の包括損失累計額から当社株主に帰属する利益(損失)へ組み替えられると予想しています。

#### ヘッジとして指定されていない金融商品

当社グループは、為替及び金利の変動によるリスクを管理するために、先物為替予約、金利スワップ契約、通貨スワップ契約及び通貨オプションを締結しています。これらの契約のうち、一部についてはヘッジ会計を適用するために必要とされているヘッジ指定をしていませんが、経済的観点からはヘッジとして有効と判断しています。

これらのヘッジ指定されていない金融派生商品の公正価値の変動は、ただちに収益または費用として認識されます。

2012年3月31日及び2012年6月30日現在における当社グループの先物為替予約の契約残高、金利スワップ契約の想定元本総額、通貨スワップ契約の元本総額及び通貨オプション残高は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	2012年3月31日現在	2012年6月30日現在
先物為替予約		
外貨売契約	167,866	129,715
外貨買契約	71,688	162,740
金利スワップ契約	403,791	402,046
通貨スワップ契約	164,678	100,821
通貨オプション	—	27,962

(2) 金融商品の公正価値

2012年3月31日及び2012年6月30日現在における金融商品の公正価値及び四半期連結貸借対照表計上科目は、以下のとおりです。

	計上科目	(単位：百万円)	
		2012年 3月31日現在	2012年 6月30日現在
ヘッジ指定の 金融派生商品：			
資産：			
先物為替予約	前払費用及びその他の流動資産	3,115	2,811
通貨オプション	前払費用及びその他の流動資産	—	393
負債：			
先物為替予約	その他の流動負債	△2,735	△907
金利スワップ契約	その他の流動負債	△1,161	△553
	その他の固定負債	△477	△1,927
通貨オプション	その他の流動負債	—	△270
ヘッジ指定以外の 金融派生商品：			
資産：			
先物為替予約	前払費用及びその他の流動資産	1,494	2,382
通貨スワップ契約	前払費用及びその他の流動資産	—	27
負債：			
先物為替予約	その他の流動負債	△3,173	△558
金利スワップ契約	その他の固定負債	△25	△23
通貨スワップ契約	その他の流動負債	△465	△1,189

(単位：百万円)

	2012年3月31日現在		2012年6月30日現在	
	貸借対照表 計上額	公正価値	貸借対照表 計上額	公正価値
金融派生商品以外： 負債：				
社債及び長期借入金	△1,082,046	△1,088,464	△1,079,597	△1,086,912

上記の表は、公正価値が貸借対照表計上額とほぼ同額である金融商品及びリース関連の金融商品を除いています。また、投資有価証券及びその他の投資に関しても、注記5.にて開示されているため上記の表から除いています。

当社グループは、これらの金融商品の公正価値を見積るに当たって、期末時点での市場情勢とリスクの見積りに基づいた種々の方法及び仮定を用いています。

現金及び現金同等物、受取手形及び売掛金、短期借入金、支払手形及び買掛金並びに未払金及び未払費用を含む一定のものは、その大部分が満期までの期間が短いため、貸借対照表計上額と公正価値はほぼ同額であるとみなしています。

投資有価証券及びその他の投資の一部は、公表されている市場価格を用いています。

社債及び長期借入金の公正価値は、公表されている市場価格により、あるいは公表されている市場価格が存在しない場合には将来のキャッシュ・フローの見積現在価値により見積り、レベル2又はレベル3に分類しています。

その他の金融商品の公正価値の決定には、将来キャッシュ・フローの見積現在価値及び再取得価額等の手法が用いられています。

これらの公正価値は、必ずしも期末日現在での市場における実現可能額を示していません。

2011年度第1四半期連結累計期間における金融派生商品の四半期連結損益計算書への影響は以下のとおりです。

キャッシュ・フロー ヘッジ：

	(単位：百万円)			
	その他の包括利益(△損失)		損益認識額 (ヘッジ非有効部分及び有効性評価より除外)	
	計上額	その他の包括利益(△損失) から損益への振替 計上科目	計上額	計上科目
先物為替予約	△281	その他の収益	224	その他の収益
金利スワップ契約	8	その他の費用	△290	104

ヘッジ指定外の金融派生商品：

	(単位：百万円)	
	損益認識額	
	計上科目	計上額
先物為替予約	その他の費用	△1,725
通貨オプション	その他の収益	4

2012年度第1四半期連結累計期間における金融派生商品の四半期連結損益計算書への影響は以下のとおりです。

キャッシュ・フロー ヘッジ：

(単位：百万円)

	その他の包括	その他の包括利益(△損失)		損益認識額	
	利益(△損失)	から損益への振替		(ヘッジ非有効部分及び有効性評価より除外)	
	計上額	計上科目	計上額	計上科目	計上額
先物為替予約	△457	その他の費用	△1,120	その他の収益	134
金利スワップ契約	△588				
通貨オプション	123				

ヘッジ指定外の金融派生商品：

(単位：百万円)

	損益認識額	
	計上科目	計上額
先物為替予約	その他の収益	3,095

### 13. 契約債務及び偶発債務

2012年3月31日及び2012年6月30日現在における有形固定資産の購入に係る契約債務及びライセンス等に係る無条件購入義務の合計は、それぞれ31,151百万円及び23,956百万円です。

2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、注記14.にて開示されている保証債務以外の偶発債務は、それぞれ434百万円及び407百万円であり、手形の割引に係る遡及義務等が含まれていません。

### 14. 保証

#### 非連結関係会社及び第三者の借入に対する保証

当社グループは、非連結関係会社及び外部の第三者に対して、当社グループの製品・サービスの販売を支援するために借入及びある種の金融債務に対して保証を付しています。これらの債務保証は、2012年3月31日現在では2012年から2020年にかけて、2012年6月30日現在では2012年から2020年にかけて期限が到来するか、あるいは、保証履行による支払または保証の取消により終了します。保証履行による支払は、被保証人による債務の不履行により生じることになります。2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、これらの債務保証による潜在的な最大支払額は、それぞれ308,445百万円及び328,684百万円です。

#### 従業員の住宅ローンに対する保証

当社グループは、従業員の住宅ローンに対して保証を付しています。これらの保証は、2012年から2032年にかけて期限が到来します。保証履行による支払は、被保証人による債務の不履行により生じることになります。2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、これらの債務保証による潜在的な最大支払額は、それぞれ6,059百万円及び5,934百万円です。しかしながら、当社グループは、債務保証の履行による支払の大部分は当社グループの保険によって補填されると考えています。

#### セール・アンド・リースバック取引における残価保証

当社グループは、機械装置についてセール・アンド・リースバック取引を行っています。当社グループはこれらの残価保証に関する支払を実行する可能性があります。当該取引におけるオペレーティング・リース契約は、2016年7月までの間に終了します。2012年3月31日及び2012年6月30日現在における残価保証による潜在的な最大支払額は、それぞれ22,837百万円及び18,667百万円です。

#### 受取手形及び売掛金の不履行に対する保証

当社グループは、受取手形及び売掛金を譲渡する証券化取引を行っています。当社グループは、受取手形及び売掛金の売却時において、受取手形及び売掛金の不履行が生じた時にそれらを買戻す義務を負っています。当該受取手形及び売掛金は、通常3ヶ月以内に期限が到来します。2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、当該買戻し義務に対する潜在的な最大支払額は、それぞれ7,862百万円及び8,806百万円です。

2012年3月31日及び2012年6月30日現在において、上記に記載した保証に関して計上した負債の金額に重要性はありません。

## 製品保証

製品保証費用の発生見込額は、製品が顧客に販売された時点で未払計上されています。製品保証費用に対する見積りは、主として過去の経験に基づいてなされています。

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における製品保証引当金の変動は、以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	2011年度 第1四半期連結累計期間	2012年度 第1四半期連結累計期間
期首残高	36,961	40,902
増加額	10,454	16,927
目的使用による減少額	△9,586	△16,747
外貨換算調整額	△391	△1,276
四半期末残高	37,438	39,806

## 15. 訴訟事項

2007年1月、欧州委員会は、ガス絶縁開閉装置市場における欧州競争法違反行為があったとして、当社を含む19社に課徴金を賦課することを決定しました。しかし、当社の調査では、当社はかかる欧州競争法に違反する行為を行っておらず、本決定について争うため2007年4月にEU一般裁判所に決定の取消しを求めて訴訟を提起しました。2011年7月、EU一般裁判所の判決が下り、当社に対する課徴金は全て取り消されましたが、欧州競争法違反行為があったとする欧州委員会の決定は支持されました。しかしながら、かかる判決内容は当社の事実認識と異なるため、2011年9月、EU司法裁判所に上訴しました。今後、上訴審において当社の考えを主張していきます。また、2012年6月、欧州委員会は、上述の判決により取り消された課徴金を算定し直し、当社に対し再賦課することを決定しました。この決定による課徴金の額は、当社に対し56.8百万ユーロ、これに加えて三菱電機株式会社と連帯して4.65百万ユーロとなっています。本決定に対する今後の具体的な対応は、EU一般裁判所への提訴も含め、現在検討しています。

2007年8月、ジーイーキャピタルリーシング株式会社(現在の日本GE株式会社。以下「日本GE」という。)は、当社並びに当社子会社2社を含む6社に対して、架空取引により被った損害の賠償を求める訴訟を提起しました。当該架空取引は、元従業員が会社外で行った不正行為ですが、日本GEは使用者責任に基づき、請求を行ってきたものです。2010年10月、日本GEは被告であったトランスコスモス株式会社及びPTCジャパン株式会社と和解し、当社等に対して有する損害賠償請求権を譲り渡しました。2011年7月、東京地方裁判所は、当社に約4,550百万円を支払うよう命じましたが、当社は、元従業員が行った当該不正行為に対する賠償責任を負う必要がないと考えており、東京地方裁判所の判決を不服として控訴しました。

2011年2月、防衛省は、当社と防衛省の間で締結された「F-15用偵察システム」に関する開発製造請負契約につき一方的に解除の通知を行いました。2011年7月、当社は、この防衛省による解除を不当として、既に完成している部分についての代金等約9,319百万円の支払いを求める訴訟を東京地方裁判所に提起しました。当社は契約に基づき適正に業務を遂行しており当該契約解除は不当なものと考えているため、訴訟において当社の考えを主張していきます。



2012年7月、米国連邦地方裁判所において、液晶ディスプレイ関連製品の直接購入者が提起した集団訴訟に関して、違反行為全体に基づく損害を87百万米ドルと認定する陪審の評決が当社グループに対して出されました。本訴訟は、液晶ディスプレイ関連製品の購入者等が当社グループを含む液晶ディスプレイ関連事業者に対し、米国競争法違反の疑いを理由に損害賠償を求めたものです。当社グループは、液晶ディスプレイ事業において一切の違反行為はなく、違反行為及び損害を認定した評決は不当であると考えているため、今後、当社の主張が認められるよう、あらゆる法的手段を用いて対応を進めていきます。なお、本訴訟における他の被告の和解金額の合計がこの評決に基づき法律により決定される損害賠償額を超えるため、この評決による当社グループの賠償金の支払いはありません。

当社グループは全世界において事業活動を展開しており、訴訟やその他の法的手続きに関与し、当局による調査を受けています。また、今後そのようなことが生じる可能性もあります。地域ごとの裁判制度等の違いやこれらの手続きは本来見通しがつきにくいものであることから、通常の想定を超えた金額の支払が命じられる可能性も皆無ではありません。このため、これらについて当社グループに不利益な決定がなされた場合、その決定の内容によっては当社グループの事業、業績や財政状態に悪影響を与える可能性があります。また、様々な事情により、支払が命じられる可能性が極めて低いものの訴額の大きな訴訟が提起される可能性も皆無ではありません。

しかしながら、当社グループはこれらすべての争訟について十分かつ正当な抗弁ができるものと確信しています。当社グループ及び当社グループの法律顧問が現在知りうるかぎり、これらの争訟は当社グループの財政状態及び経営成績に直ちに重大な影響を及ぼすものではないと当社グループは確信しています。

## 16. 企業結合

当社の連結子会社である東芝メディカルシステムズ(株)(以下「東芝メディカル」という。)と、医療画像ソリューションを手がける世界トップクラスのメーカーである米国法人バイタル・イメージズ社(Vital Images, Inc.、以下「バイタル社」という。)は、2011年4月27日(米国東部時間)に、東芝メディカルの買収目的子会社(以下「合併子会社」という。)を通じて、バイタル社の発行済普通株式を1株あたり18.75米ドルにて買付、合併する旨の契約に合意しました。バイタル社の全発行済普通株式の公開買付けを通じて、バイタル社の全発行済普通株式の約86.7%に相当する株数の応募があり、さらに合併子会社は、バイタル社の発行した新株を買い付けるオプションを行使することにより、バイタル社の全発行済普通株式の90%超を取得しました。その上で東芝メディカルは2011年6月16日(米国東部時間)にバイタル社と合併子会社との簡易合併を行い、バイタル社は東芝メディカルの完全子会社となりました。なお、同日をもって、本公開買付に応募されなかったバイタル社の株式は、現金を受け取る権利に転換されました。本取引によって、東芝メディカルはバイタル社との融合を実現し、画像ソリューション事業を強化することで、グローバル市場で求められている先進の画像診断解析ソフトウェアや画像ソリューションを医療従事者や医療ITプロバイダーに提供することが可能になります。

当社は、ASC 805「企業結合」(以下「ASC 805」という。)に基づき、取得した資産及び引き受けた負債への取得金額の配分を実施しました。

取得金額並びに取得した識別可能な資産及び負債の取得日現在の公正価値の要約表は以下のとおりです。

	(単位：百万円)
	取得日現在
取得金額	22,105
流動資産	10,910
固定資産	2,091
償却無形資産	4,159
流動負債	2,269
識別可能純資産合計	14,891

取得した識別可能な無形資産は、主に顧客関連無形資産です。これらの無形資産の加重平均償却期間は約8.0年です。

取得金額から取得した識別可能な資産及び負債の公正価値の合計を差し引いた差額の7,214百万円をのれんに計上しており、計上したのれんは社会インフラ部門に配分されています。のれんの計上に寄与した要素は、バイタル社の献身的な販売力並びに医療施設、医療大学及び供給パートナーとの強固な関係です。

バイタル社の経営成績は、2011年度第1四半期連結会計期間より当社の連結損益計算書に含まれていますが、重要性はありません。

当社は、2011年5月19日(日本時間)、ランディス・ギア社(以下「L+G社」という。)の全ての株式の取得に関する契約を締結し、同年7月29日(英国時間)に株式取得手続きを完了し総額約23億米ドルの現金を支払い、L+G社を取得しました。

また、当社は、(株)産業革新機構(以下「INCJ」という。)とL+G社への共同投資に関する契約を締結しました。当社は、L+G社の管理運営を行う持株会社(現在のランディス・ギアホールディング社)をスイスに新たに設立し、取得したL+G社の全ての株式及び一部の債権(総額17億米ドル)を持株会社に譲渡し、同年8月22日(日本時間)に当該持株会社の株式の40%(6億8,000万米ドル)をINCJに売却しました。

L+G社は、世界に8,000社以上の顧客を有する、スマートグリッドのキーコンポーネントであるスマートメーターのリーディングカンパニーであり、世界各地域で有力な営業網を有しています。L+G社は、スマートメーターのデータを収集する高度な双方向通信技術から収集データを用いたアプリケーションサービスまでのメーターシステムを一括して提供することが可能であるとともに、先進的な通信技術とそれらを活用したサービス事業を有しています。このL+G社の顧客網・サービス事業及び技術と、当社がノウハウを持つ電力会社等のユーティリティ企業、及びビルや家庭等の需要家向けのエネルギーマネジメント技術との補完関係により、エネルギーサービスに不可欠な計量管理からクラウドを用いたサービス領域までをワンストップで担当することが可能となり、エネルギー総合管理を核としたスマートコミュニティの新たな事業領域に進出し、相乗効果を発揮することができます。当社グループは、スマートコミュニティ事業を将来に向けた新たな注力事業として位置づけており、L+G社の買収によって、上記シナジーを発揮させるとともに、クラウド、ソリューションを中心に他社との提携関係も推進し、グローバルに事業を展開していきます。

当社は、ASC 805に基づき、取得した資産及び引き受けた負債への取得金額の配分を実施し、全て完了しました。それに伴い、2011年度の連結財務諸表及び連結財務諸表に対する注記を一部遡及的に組み替えて表示しています。

取得金額(純額)及び非支配持分並びに取得した識別可能な資産及び負債の取得日現在の公正価値の要約表は以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
	取得日現在	
取得金額(純額)	126,126	
非支配持分	53,179	
合計	179,305	
流動資産	54,552	
償却無形資産	59,221	
その他固定資産	32,956	
流動負債	40,849	
固定負債	35,086	
識別可能純資産合計	70,794	

取得した識別可能な無形資産は以下のとおりです。

	(単位：百万円)	
顧客関連無形資産	36,960	(加重平均償却期間 12.8年)
技術関連無形資産	13,419	(加重平均償却期間 10.5年)
ブランドネーム	8,842	(加重平均償却期間 15.7年)

取得金額(純額)及び非支配持分から取得した識別可能な資産及び負債の公正価値の合計を差し引いた差額の108,511百万円をのれんに計上しており、計上したのれんは社会インフラ部門に配分されています。

L+G社の経営成績は、2011年度第2四半期連結会計期間より当社の連結損益計算書に含まれています。2011年度の当社の連結損益計算書に含まれているL+G社の売上高は80,982百万円です。なお、当期純損益に重要性はありません。

2012年2月1日に、当社の持分法適用会社であった東芝ファイナンス(株)(以下「TFC」という。)は、法人向け金融サービス事業を同社の子会社に会社分割により承継し、同子会社の発行済株式の90%を興銀リース株式会社に譲渡しました。

当社は、会社分割後のTFCに対して65%の追加取得を現金で行い、同社発行済株式の100%を取得したことにより同社を連結子会社としました。

当社は、ASC 805に基づき、取得した資産及び引き受けた負債への取得金額の配分を実施しました。

取得金額及び既保有持分並びに取得した識別可能な資産及び負債の取得日現在の公正価値の要約表は以下のとおりです。

	(単位：百万円)
	取得日現在
取得金額	10,906
既保有持分	5,872
合計	16,778
流動資産	121,226
固定資産	25,803
流動負債	99,292
固定負債	23,289
識別可能純資産合計	24,448

取得金額及び既保有持分の公正価値から、当社が取得した識別可能な資産及び負債を詳細に調査及び分析をした上で算定した公正価値の合計を差し引いた差額の7,670百万円を負ののれんとしてその他の収益に一括計上しています。なお、追加取得前に当社が保有していた持分の簿価は10,086百万円であり、追加取得後に再測定した公正価値との差額は損益として認識しています。

TFCの経営成績は、2011年度第4四半期連結会計期間より当社の連結損益計算書に含まれていますが、重要性はありません。

2011年4月1日時点でこれらの企業結合が行われたと仮定した場合のプロフォーマ情報(非監査)は以下のとおりです。

	(単位：億円)
	2011年度
	第1四半期連結累計期間
売上高	13,621
当社株主に帰属する四半期純損失	△3

## 17. セグメント情報

以下に報告されているセグメント情報は、そのセグメントの財務情報が入手可能であり、マネジメントが経営資源の配分の決定及び業績の検討のため、定期的に評価を行う対象となっているものです。

当社グループは、セグメント別の営業利益(損失)を各部門の業績評価に使用しています。当社グループの営業利益(損失)は、売上高から売上原価並びに販売費及び一般管理費を控除して算出しています。事業構造改善費用及び固定資産売却損益等は、当社グループの営業利益(損失)には含まれていません。

事業の種類別セグメントは、製品の性質、製造方法及び販売市場等の類似性に基づき、「デジタルプロダクツ」、「電子デバイス」、「社会インフラ」、「家庭電器」及び「その他」の5部門としています。

各部門の主な内容は以下のとおりです。

- (1) デジタルプロダクツ……………パソコン、映像機器、複合機等
- (2) 電子デバイス……………半導体、ハードディスク装置等
- (3) 社会インフラ……………エネルギー関連機器、医用機器、ITソリューション、昇降機等
- (4) 家庭電器……………冷蔵庫、洗濯乾燥機、照明器具、空調機器等
- (5) その他……………物流サービス等

### 事業の種類別セグメント情報

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における事業の種類別セグメント情報は以下のとおりです。

#### 2011年度第1四半期連結累計期間

	デジタル プロダクツ (百万円)	電子 デバイス (百万円)	社会 インフラ (百万円)	家庭電器 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	消去 又は全社 (百万円)	連結 (百万円)
売上高								
(1) 外部顧客に 対する売上高	398,924	310,920	411,089	144,654	60,518	1,326,105	—	1,326,105
(2) セグメント間の 内部売上高 又は振替高	12,969	22,186	15,822	4,879	58,192	114,048	△114,048	—
合 計	411,893	333,106	426,911	149,533	118,710	1,440,153	△114,048	1,326,105
営業利益(△損失)	△557	2,633	△3,225	1,125	3,223	3,199	922	4,121

#### 2012年度第1四半期連結累計期間

	デジタル プロダクツ (百万円)	電子 デバイス (百万円)	社会 インフラ (百万円)	家庭電器 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	消去 又は全社 (百万円)	連結 (百万円)
売上高								
(1) 外部顧客に 対する売上高	330,317	286,683	485,220	136,344	30,299	1,268,863	—	1,268,863
(2) セグメント間の 内部売上高 又は振替高	9,569	20,977	14,994	5,286	50,548	101,374	△101,374	—
合 計	339,886	307,660	500,214	141,630	80,847	1,370,237	△101,374	1,268,863
営業利益(△損失)	△3,603	9,386	8,388	109	△2,356	11,924	△453	11,471

- (注) 1. セグメント間の取引においては独立企業間価格を用いています。  
 2. 2011年度の組織変更に伴い、2011年度の数値を新組織ベースに組み替えて表示しています。  
 3. 2011年度の液晶ディスプレイ事業の業績を電子デバイス部門から他の部門に組み替えて表示しています。

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間におけるセグメント別営業利益(△損失)の合計と継続事業からの税金等調整前四半期純利益(△損失)との調整は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	2011年度	2012年度
	第1四半期連結累計期間	第1四半期連結累計期間
セグメント別営業利益(△損失)の合計	3,199	11,924
消去又は全社	922	△453
小計	4,121	11,471
受取利息及び配当金	2,250	2,406
持分法による投資利益	4,162	2,281
その他の収益	15,296	5,230
支払利息	△7,226	△8,193
その他の費用	△15,457	△27,854
継続事業からの税金等調整前 四半期純利益(△損失)	3,146	△14,659

## 地域別セグメント情報

### 売上高

2011年度及び2012年度の各第1四半期連結累計期間における顧客の所在地に基づく地域別売上高は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	2011年度	2012年度
	第1四半期連結累計期間	第1四半期連結累計期間
日本	577,933	551,243
海外	748,172	717,620
アジア	295,296	261,569
北米	241,313	224,079
欧州	151,375	165,111
その他	60,188	66,861
合計	1,326,105	1,268,863

- (注) 1. 個別に開示すべき重要性のある国はありません。  
 2. 単一の外部顧客との取引から得られる収益の金額に重要性はありません。

## 18. 重要な後発事象

当社の連結子会社である東芝テック㈱(以下「テック」という。)は、2012年4月17日(日本時間)にInternational Business Machines Corporation(以下「IBM」という。)と同社のリテール・ストア・ソリューション事業を取得することに合意し、同年7月31日(米国東部時間)に事業譲受を完了しました。事業取得の対価は約850百万米ドルです。

また、テックが80.1%、IBMの子会社であるIBM Taiwan Holdings B.V.(以下「IBM Taiwan」という。)が19.9%の出資比率からなる持株会社(東芝グローバルソリューション・ホールディング㈱、以下「持株会社」という。)を日本に設立するとともに、その傘下に、米国、カナダ、メキシコ及びオーストラリアにおいて新会社を設立し、事業を開始しました。今後、上記以外の国・地域においても新会社を設立し、行政許認可等の諸手続きを経て、事業を開始する予定です。

なお、今回の事業取得の対価については、テックからIBMに対して、初回の支払(51.0%相当)は実行されており、今後、その支払から1年後(29.1%相当)と3年後のIBM Taiwan保有株式の買取(19.9%相当)において支払が実施され、最終の支払と同時に持株会社はテックの完全子会社となります。

テックは、リテール・ストア・ソリューション事業取得後、米州、欧州、日本、アジアなど全世界で成長著しいリテールソリューション市場において、高水準の商品・ソリューションをグローバルに展開し、顧客に新しい価値を提供するリテールPOSシステムのリーディング・カンパニーとなります。

当四半期報告書提出日現在において、当該取得の会計処理が完了していないため、ASC 805に関する詳細な情報は開示していません。

## 2【その他】

訴訟事項については、四半期連結財務諸表に対する注記15. にて記載しています。

2012年5月8日開催の取締役会において、2012年3月31日現在の株主名簿に記載又は記録をされている株主又は質権者に対し、次のとおり剰余金の配当(期末)を行うことを決定しました。

① 1株当たり配当金	4円
② 配当金総額	16,939,863,872円
③ 支払請求権の効力発生日及び支払開始日	2012年6月1日



## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

# 独立監査人の四半期レビュー報告書

平成24年 8 月 10 日

株式会社東芝

代表執行役社長 佐々木 則夫 殿

## 新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	濱	尾	宏	Ⓔ	
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	石	川	達	仁	Ⓔ
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	吉	田	靖	Ⓔ	
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	谷	渕	将	人	Ⓔ

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている株式会社東芝の平成24年4月1日から平成25年3月31日までの連結会計年度の第1四半期連結会計期間(平成24年4月1日から平成24年6月30日まで)及び第1四半期連結累計期間(平成24年4月1日から平成24年6月30日まで)に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括損益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び四半期連結財務諸表に対する注記について四半期レビューを行った。

### 四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」附則第4条の規定により米国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準(四半期連結財務諸表に対する注記1及び2参照)に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

#### 監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、米国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準(四半期連結財務諸表に対する注記1及び2参照)に準拠して、株式会社東芝及び連結子会社の平成24年6月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第1四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

(注) 上記は、四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(四半期報告書提出会社)が別途保管しております。